國學院大學学術情報リポジトリ

戦闘美少女と魔法：「セーラームーン」と「プリキュア」に見る魔法の意味

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 研士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001475

戦闘美少女と魔法
―「セーラームーン」と「プリキュア」に見る魔法の意味―

石井研士

論文要旨

本論の目的は、戦後の日本人の宗教性の変容とメディアの急激な発展を背景にして、「魔法少女」がどのような意味を有してきたかを考察することである。「魔法少女」の嚆矢は昭和四一年に放送が開始された「魔法使いサリー」だというのがほぼ定説である。後継番組の「ひみつのアッコちゃん」が反響を呼び定着することになった。その後も「魔法少女」は継続して製作されるが、しだいに停滞を余儀なくされる。こうした状況は一九九〇年代に入って劇的に変化する。一九九〇年代に入って多くの「魔法少女」作品が同時に放送されるようになり、大ヒットとなる作品が現れた。平成四年に放送が始まった「美少女戦士セーラームーン」である。さらに平成一六から現在に至るまで「プリキュアシリーズ」が放送され支持を得ている。人気番組になぜ「魔法」が用いられるのか、その意味を分析することで、現代日本社会における宗教性を考察する。

はじめに

筆者はすでに「魔法少女」をめぐって二つの論考を公表している。[1]「魔法少女」として括られる一群のアニメ・マンガは昭和四一年にテレビ放送された「魔法使いサリー」に始まり、今日まで脈々と続いている。現在モチーフは多様化し、作品が対象とする年齢も、当初の若年層から格段に広がった。近年では「魔法少女まどか☆マギカ」が社会現象化したといわれるが、[2]このアニメは深夜枠での放送である。[3]後にインターネットで配信され、動画サイトやレンタルＤＶＤとして見ることができるようになるが、それでも年齢層とし

まんがタイムきらら編『魔法少女　まどかマギカ　公式ガイドブック』芳文社、平成23年

ては東映魔女っ子シリーズが想定していたような「女児」でないことは明かである。

本論の目的は、多様で大量の「魔法少女」における魔法の意味を、わずかな言葉で定義したりまとめたりすることではない。戦後の日本人の宗教性の変容とメディアの急激な発展を背景にして、「魔法少女」がどのような意味を有してきたかを考察したいと思う。

戦後の日本人の宗教性を鳥瞰すると、伝統的な儀礼に支えられた宗教性が急速に影を潜めていくのに対して、情報としての宗教性がメディアを通して我々の生活に関わりを持つようになっていったことを指摘することができる。[4]

本論で考察の対象とするアニメやマンガは、主として若年層を対象としたものを想定している。メディアを媒介とした宗教性という時に、アニメやマンガにおいて表象される「魔法少女」はどのような意味を持ったのだろうか。そうしたものの多くに宗教性が含まれているとすれば、家庭から神棚や仏壇が消え、伝統社会と比較して宗教性を維持し得なくなった家庭に育った子供達に及ぼした影響は少なくないかもしれない。極論ではあるが、「宗教的な主題のないアニメを捜す方が難しい」[5]という研究者もいるし、宮崎アニメや「美少女戦士セーラームーン」に多様な宗教性が潜んでいると指摘する者もいる。[6]しかしながら、アニメやマンガの宗教表象がそのまま視聴者や読者に影響力を持ったとは、経験的にも受け入れがたい。そもそも表象される宗教性自体がどのようなものかどうかも曖昧である。宗教団体が提供するアニメやマンガとは異なって、宗教性を伝えることを目的に制作されたわけではない。番組にはスポンサーがおり、商品の販売や認知の向上、企業イメージのアップが図られているわけで、宗教性の採用は少なくともそうした目的に沿うものであるはずである。

ここで簡単に「魔法少女」の歴史をたどっておくと、嚆矢は「魔法使いサリー」だというのがほぼ定説である。[7]興行的に成功した「魔法使いサリー」を制作した東映動画は、引き続いて「ひみつのアッコちゃん」を制作した。この二作品の反響に支えられて、東映動画は次々と「魔女っ子シリーズ」といわれる作品を作り続けた。一九八〇年代までの「魔法少女」作品は、いくつかの制作会社で作られたが、「魔女っ子シリーズ」を牽引してきた東映動画は昭和五五年の「魔法少女ララベル」で一端幕を下ろす。理由はこのジャンルが

停滞したためであった。[8] その後、「魔法の天使クリィミーマミ」（昭和五八年七月一日～昭和五九年六月二九日）、「おジャ魔女どれみ」（平成一一年二月七日～平成一五年一月二六日）など現在まで多くのファンを持つ作品も複数みられるが、「魔法使いサリー」「ひみつのアッコちゃん」を上回るような作品は現れなかった。

こうした状況は一九九〇年代に入って劇的に変化する。第二次アニメブームといわれるこの時期に、「名探偵コナン」（平成六年にマンガ、平成八年にアニメ）、「ポケットモンスター」（平成八年にゲーム、平成九年にアニメ）、「ワンピース」（平成九年にマンガ、平成一一年にアニメ）が放送され、「新世紀エヴァンゲリオン」（平成七年にアニメ）の大ブームが起こったのだった。「魔法少女」については、まず一九九〇年代に入って多くの作品が同時に現れるようになった。そして、大ヒットとなる作品が現れた。平成四年に放送が始まった「美少女戦士セーラームーン」（以下「セーラームーン」）である。

「セーラームーン」がどのような反響を得たかを論じるのはそう簡単ではない。「セーラームーン」は平成五年度の第一七回講談社漫画賞少女部門を受賞しているが、これまでに売れた漫画のベストテンには入っていない。視聴率も驚くような数値ではさなそうである。その一方で、現在でも知名度が高いこと、アイススケートのメドベージェワ選手が日本語歌詞を歌うなど、海外にまで知られていることもわかっている。明確な根拠は指摘できなくとも、「セーラームーン」を魔法少女の一九九〇年代の成功例として挙げることはそれほど的外れではないだろう。

「セーラームーン」の研究史

「セーラームーン」に対する社会的反響が大きかったことの証左になるかもしれないが、「セーラームーン」に関するかなりの言説が見られる。それは評論だけではなく、研究レベルでも存在する。一連の宮崎アニメ、「新世紀エヴァンゲリオン」、「魔法少女まどか☆マギカ」などを除けば、見ることのできない特徴である。評論と研究の境界は微妙であるが、「セーラームーン」をめぐる考察をまとめておくと以下のようになる。

平成七年　高田明典『アニメの醒めない魔法』ＰＨＰ研究所
平成八年　四方田犬彦「アニメの越境と『セーラームーン』」『ユリイカ』28（9）、82－87頁
平成九年　藤本由香里「女の子の欲しいものがなんでも詰まったセーラームーンの神話と構造」『別冊宝島　アニメの見方が変わる本』宝島社
平成九年　山口佳代子「男装する『美少女戦士』－異性装のキャラクターから見るアニメ『セーラームーン』」『女性学年報』第一八号
平成一〇年　山田利博「文学としてのマンガ：現代版竹取物語・「セーラームーン」について」『宮崎大学教育学部紀要　人文科学』85、33－43頁
平成一〇年　斎藤美奈子『紅一点論』ビレッジセンター出版局
平成一二年　四方田犬彦『マルコ・ポーロと書物』エイ出版社
平成一二年　古田明子「Mother/Girl－母なる少女：『美少女戦士セーラームーン』にみる通過儀礼」『女性学評論』14、201－224頁
平成一八年　四方田犬彦『かわいい論』筑摩書房
平成二一年　東園子「仲間は使命とともに－『美少女戦士セーラームーン』における仲間という存在の意味」『年報『少女』文化研究』（3）、93－105頁
平成二三年　中川裕美「少女マンガの「戦う少女」にみるジェンダー規範－『リボンの騎士』から『美少女戦士セーラームーン』まで」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』（6）、127－142頁
平成二四年　山崎鎮親「未来の否定と永遠の現在：「魔法少女」の成熟」『相模国文』39、117－131頁
平成二五年　須川亜紀子『少女と魔法－ガールヒーロはいかに受容されたのか』ＮＴＴ出版
平成二九年　山田利博「新旧「セーラームーン」アニメの比較によるジェンダー理解の変容について」『宮崎大学教育学部紀要。人文科学』89、25－33頁
平成二九年　嵯峨景子「『美少女戦士セーラームーン』における「改変」と幾原邦彦:少女たちの欲望と九〇年代」『ユリイカ』49（15）、

136－143頁

平成二九年　青柳美帆子「全ては『劇場版美少女戦士セーラームーンR』から始まった」『ユリイカ』49（15）、144－150頁

「セーラームーン」が、東映動画が製作した一連の魔法少女シリーズのひとつであることを前提とした上で、これらの論文や評論を読んでまず気づくのは、魔法に関するまとまった言及や考察がないという事実である。論者の視点はフェミニズム、記号論、構造論など多様である。彼らの関心を引いたのは「美少女」と「戦闘」の組み合わせであり、本論との関わりで言えば「変身」ということになる。不思議な力によって中学2年生の女の子が「変身」し、変身することで獲得されたアイテムや力によって敵と戦うのであるから、「変身」の成立かつ「変身」の目的となっている不思議な力の獲得そのものや背景（理由）に関する考察があってしかるべきと考えるが、分析者の関心は「美少女」が「闘う」こと、「変身」そのものに向けられている。

「セーラームーン」とは

講談社編『美少女戦士セーラームーン 20周年記念BOOK』講談社、平成28年

アニメの「セーラームーン」は武内直子作のマンガ『セーラームーン』を原作としていると思われがちであるが、当初からアニメ化を想定して作られた作品である。武内は講談社『よいこ』平成三年八月号に「コードネームはセーラーV」という読み切りを掲載した。東映動画は、これを元にして、五人のセーラー戦士や四天王を登場させるシリーズを加味して、アニメ版「セーラームーン」の企画を完成させた。武内は「セーラーV」の設定を長期シリーズ用に発展させ、平成四年二月号から『なかよし』で連載を開始した。テレビ放送は同年三月七日からである。東映動画は、土曜日夕刻七時という男の子枠に、男の子の視聴率も獲得できるような女の子路線へとシリーズの方向性を修正したのだという。(9)

番組は一年間で終了し、後番組は男の子向けスポーツアニメが候補に挙げられていたが、「希にみる大ヒット」[10]となり、続編「セーラームーンR」の制作が決定された。以下シリーズは次のようになる。

美少女戦士セーラームーン　平成四年三月七日－平成五年二月二七日
美少女戦士セーラームーンR　平成五年三月六日－平成六年三月十二日
美少女戦士セーラームーンS　平成六年三月十九日－平成七年二月二十五日
美少女戦士セーラームーンSuperS　平成七年三月四日－平成八年三月二日
美少女戦士セーラームーンセーラースターズ　平成八年三月九日－平成九年二月八日
美少女戦士セーラームーンCrystal　平成二六年七月五日－平成二七年七月十八日

当初からマンガとアニメのメディアミックスとして始まっているが、劇場版アニメをはじめゲーム、ミュージカル、テレビドラマ（実写）などが制作されている。

ストーリーであるが、現在ホームページ上で公開されているオフィシャルサイト「美少女戦士セーラームーン25周年公式サイト」（http://sailormoon-official.com/）にはあらすじとして物語の始まりの部分がごく簡単に触れられているだけである。ここでは『アニメ作品事典－解説・原作データ付き－』（日外アソシエーツ、平成二二年）に記されている、オフィシャルサイトよりは少し長い作品解説を引用する。「セーラームーンR」以下も個別に解説されているが、もっとも重要な最初のシリーズ「美少女戦士セーラームーン」の解説にとどめる。

「月に代わっておしおきよ！」という決めセリフが広く世間でも話題を呼んだ、変身ヒロインものの革命的作品。ドジで泣き虫な中学生・月野うさぎは、ある日言葉を話す猫・ルナからセーラームーンへの変身能力を与えられる。その力を用いて人間のエナジーを狙

うダークキングダムに戦いを挑むうさぎの前に、続々とセーラー戦士の仲間が集結。実は、彼女たちは月の王女セレニティとその側近たちの生まれ変わりだったのだ。[11]

引用文章の最後にある「生まれ変わり」について、筆者はすでに若干の考察を行っている。[12] 本論では、テーマの「魔法」の視点から考察を行うものである。

「変身」と「変装」

先に挙げた文献を初め、多くの論者が「変身」と「美少女」「闘う」ことを中心に論を組み立てているが、「セーラームーン」の変身は、髪が長くなる装飾品が加わるなどするが、変身前と後とで体型は基本的に変わらない。[13] 言ってみれば、同型の変身である。サリーやアッコちゃんは明らかに別の者・物になるわけで、セーラームーンはそれまでの「魔法少女」とは大きく異なっている。主人公の月野うさぎが変身する際の呪文は「ムーンプリズムパワー、メイクアップ！」である。この点を斎藤美奈子は「変身とは、武装ではなく化粧、パワーアップではなくメイクアップ・・・シンデレラの変身と同じ着替え」[14]と指摘している。

講談社編『美少女戦士セーラームーン Crystal　公式ファーストビジュアルブック』講談社、平成26年、12頁・15頁

ところで、世間にも広く知られ、セーラームーンの代表的なコスチューム姿とは別に、主人公が本来の意味で変身することがある。物語の中で月野ウサギは「変装ペン万年筆」を使って、看護婦や大人に「変装する」（作中の表現）のである。服装だけでなく体型も変わり、父親の前でも本人であることが分からない[15]。管見の及ぶ限り、主人公の「変装」に言及する論者はいない。図表1が一覧であるが、回数も少なく、「変装」することで、効果を上げるようなことは期待されていない。「セーラームーン」では、「変装」はストーリー展開上の単なるアクセントであって、強調されるのは、戦闘モードに同形変身＝メイクアップすることである。

図表1　「変装」一覧

マンガ	第1巻－64頁	大学病院勤務の医者
	第1巻－104頁	スチュワーデス
	第1巻－135頁	お姫様
	第1巻－180頁	花婿（男性）
アニメ	第3話	アナウンサー
	第6話	大人のミュージシャン
	第8話	大学病院勤務の医者
	第10話	スチュワーデス
	第12話	女流カメラマン
	第16話	花嫁
	第22話	お姫様
	第30話	易者
	第42話	カモメの水兵さん

＊　マンガは『美少女戦士セーラームーン新装版』全12巻、アニメは全46話

「変身」できる理由と「変身」による力の獲得

セーラームーンへの変身は、ルナというネコからもらった「変身ペン」を使い、それぞれの戦士に与えられた呪文を唱えることで完

成する。[16] ルナは日本語をしゃべり、コンピュータを操る。ルナはセーラー戦士にアイテムを与え、呪文を唱えることを教える。セーラー戦士に能力を与える猫のルナがなぜそうした不思議な力を持っているのか、なぜセーラー戦士は変身し不思議な力を持ち必殺技を使えるようになるのか、とくだん理由は問われない。変身＝不思議な能力の獲得という事実として了解されるだけである。

もっとも、タイトルに「ムーン」がついており、ルナの額に隠されていたのは三日月である。変身のための呪文は「ムーン・プリズム・パワー！メイクアップ‼」であり、決めゼリフは「月に代わっておしおきよ！」である。読者は漠然とながらも「月」との関係は想定しているに違いない。さらに、次々と現れる仲間のセーラー戦士がすべて星の名前を冠しているにいたって、星の力、宇宙のエネルギーといったものが作用していると思うだろう。しかしその程度であって、それらを体系化して理解したり、背景の世界観を捉えようとすることはないのではないか。

セーラー戦士は変身するとコスチュームが変わるだけでなく、必殺技を繰り出して敵を倒すことができるようになる。必殺技は、当初の状態から、次々に新しい強力な技へと必要に応じて増えていく。以下は、第一シリーズで使われている主な必殺技である。窮地に陥れば、さらに強力な必殺技が使えるようになる。

セーラームーン　必殺技一覧

	セーラー戦士	アイテム	必殺技	効果
月野うさぎ	セーラームーン	ティアラ ムーン・スティック	ムーン・ティアラ・アクション ムーンヒーリング・エスカレーション	ティアラを円盤状にして投げつける 悪いエナジーを浄化する
水野亜美	セーラーマーキュリー		シャボン・スプレー	霧を出して周囲の温度を変える
火野レイ	セーラーマーズ	ペタンコお札	ファイヤー・ソウル ファイヤー・ソウル・バード	炎の渦を投げつける 炎の渦を投げつける
木野まこと	セーラージュピター		シュープリーム・サンダー シュープリーム・サンダー・ドラゴン	静電気を集めて電撃を出す 静電気を集めて電撃を出す
愛野美奈子	セーラーヴィーナス		クレッセント・ビーム クレッセント・ビーム・シャワー	右手人差し指から熱光線を出す 右手人差し指から熱光線を出す

その他にも、なんの説明もなく、空を飛んだり、瞬間移動かと思われるようなことが起こる。

「変身」とは

早い時点で論評を行った高田明典は、セーラー戦士がコスチュームを着ることによって「中学生から成熟した女への同形変態を実現する」と指摘し、「誰しもが現在の年齢のママで「セーラームーン」になれる（女になれる）、ということを暗示」していると述べている。[17] そしてそれは、同形であるがゆえに成長の拒否の心理構造が存在するとも述べている。

同じく早くからセーラムーンに関心を持ち、繰り返し書籍で取り上げてきた四方田犬彦は高田とは異なった分析を行っている。セーラームーンの敵が、「セクシーで、…原色の皮膚と巨大な乳房を持ち、蛇や蜥蜴、蔓草と隠喩的な関係を持って、半裸に近い姿」をした成熟した女性であるのに対して、セーラー戦士は「清楚なセーラー服を身にまとい、そこからはいささかも性的なフェロモンは放出されない。…成熟して性的な存在であることは悪と同義語である。そして世界を真に救済できるのは、…どこまでもジェンダー的に明確な分水嶺の手前に留まり、成熟を躊躇している少女たちである」と述べている。[18]

高田の同形のまま「女になれる」という説明はわかりにくいし、四方田のいう「成熟の拒否」もまた、「変身」が一部の男性に十分に性的なイマジネーションを惹起したであろう[19]ことを考えると簡単に首肯できない。この点に関しては本論とは直接関係しないのでこれ以上は踏み込まない。

「セーラームーン」における変身はアニメにおいて印象的に表現されている。それまでの魔法少女が一瞬で変身するのに対して、明らかに意図的に、変身シーンが構成されている。四方田の表現を引用すると「裸体となった彼女は激しく回転し、恍惚状態で舞踏を繰り返しながら、戦士へと変身を遂げる」ということになる。[20] ところで、評者たちが問題とする「変身」はアニメでの変身であってマンガのそれではない。マンガでの変身は数コマで終了し数頁に及ぶようなことはない。アニメでは、水戸黄門のおきまりのシーンのよう

に、毎回儀礼的に同じ変身シーンが40秒以上繰り返されるのである。

儀礼的といったが、変身してセーラー戦士の姿でいる間は、非日常的な世界である。どのような必殺技も可能である。変身は敵と闘う非日常性を構築するための手段、装置ともいえる。

変身と日常性の回復

変身して戦う（そして勝利する）ことに番組の主たるモチーフのひとつとして設定されているが、その結果はどのようなものなのだろうか。戦いが終わり日常が回復するが、「変身」が解けるシーンはない。あるのはもとの日常だけである。敵によってダメージを受けた建物や街、傷ついた人々は何もなかったかのように（戦いの記憶すらないようだ）、もとの日常生活の延長線上にある。主人公の月野うさぎは元の中学生に戻るが、変身し特殊な能力による非日常的な世界での戦闘を経ても、とくだん成長している様子は見られない。うさぎに対する両親や学校の友人による認知や評価は変わらない。相変わらず勉強は苦手で、生活態度もいぜんとして母親に叱られるままである。生意気な弟には「ばかうさぎ」とののしられる。「変身」を儀礼的と表現したが、「変身」を経ることで集団としての仲間との絆と理解はより強固になる。しかしながら家族や学校といった場での社会的認知は生まれない。

さきほどの高橋と四方田の議論に立ち返れば、セーラームーンにおける変身は、成熟への願望でも拒否でもなく、ただひたすら日常に戻ることを希求しているといえるように思える。いかに日常を取り戻すことに腐心しているかを第一シリーズを見ることで理解したいと思う。「セーラームーン」の第一シリーズは、セーラー戦士の壮絶な死と再生で終わる。放送された当時、メインキャラクターの相継ぐ死に動揺した視聴者から新聞社に投書があったとされる[21]。最終話の一週前の第45話で、セーラージュピターがダーク・キングダムの女王クイン・ベリル直属の妖魔部隊であるＤＤガールズに捕まる。セーラージュピターは必殺技を放って二人を倒すが死亡する。次におとりとなって残ったセーラーマーキュリーが敵の幻影攻撃を封じるも死亡。セーラームーンをかばったセーラーヴィーナスがＤＤガールズを1人倒すも死亡。最後にセーラーマーズがセーラームーンに攻撃しようしたＤＤガールズを岩の中から必殺技で倒し、最

後の1人の手を掴みファイヤー・ソウルで焼き尽くして死亡する。

最終話では、タキシード仮面（プリンス・エンディミオン）がクイン・ベリルの攻撃からセーラームーンをかばい死亡する。セーラームーン（プリンセス・セレニティ）は、死んだセーラー戦士の魂の力を借りてスーパー・ベリルを倒すが、銀水晶の力を解放したため死亡する。ところが、死亡する寸前に普通の生活に戻りたいというセーラームーンの願いが奇跡を起こし、銀水晶の力によって死亡したセーラー戦士全員を転生させるのである。全員が転生したのはもとの世界である。転生後はセーラー戦士だったことや、戦いの記憶は全て忘れているという設定である。

もともと「セーラームーン」は次のシリーズが想定されていなかった。とすれば、なおさら「日常」に戻ることの重要性は指摘していいだろう。

プリキュアシリーズと魔法

先に「セーラームーン」に関する研究論文一覧に斎藤美奈子の『紅一点論』（ビレッジセンター出版局、平成一〇年）を挙げておいた。研究というよりは、思い切りの良い発想を前面に出した評論であるが、巧に特徴を抽出していて広く読まれた。斎藤は、アニメの国を男の子の国と女の子の国にステレオタイプ化して説明して見せた。斎藤は「『セーラームーン』以後は、ヒロインも戦うのが定石[22]」としている。プリキュアシリーズは戦う女の子の物語である。斎藤の指摘が正鵠を射ているかどうかを問題視するつもりはない。「セーラームーン」が美少女と戦いを結びつけた最初の作品と見なされていること、セーラームーンが魔法と結びつけられていないことを確認したいのである。

美少女戦士セーラームーンをヒットさせた東映動画は、女児向け作品として平成一六年から「ふたりはプリキュア」（以下「プリキュア」）を放映する。朝日放送テレビの制作であり原作はない。放送はテレビ朝日系列24局で放送時間は日曜8時30分から9時までの30分番組である。以来平成三一年現在まで、シリーズ毎に主人公が変わり物語もリセットする形式で放送を続けている長寿番組である。現在は

『稲上晃東映アニメーションワークス』一迅社、平成28年

16シリーズに当たる「スター☆トゥインクルプリキュア」が放映中である。「おジャ魔女どれみ」が4年間、「美少女戦士セーラームーン」でも5年間だったことを考えると、たいそうな長寿番組である。

先に見たようにセーラームーンに関しては、評論をはじめ、少なくない数の論文が存在している。しかしながらプリキュアシリーズに関しては、16年に及ぶ大ヒットであるにも関わらず、研究論文はわずかである。[23]

東映アニメーション最長の16シリーズ、総勢50人に及ぶプリキュアが活躍するシリーズの内容を要約することは困難である。シリーズとはいっても同工異曲ではなく、メインキャラクターの性格や数、変身ポーズの変化など多様で一律には論じられない。本論では、シリーズ化されるきっかけとなったヒット作である第一シリーズを中心に、シリーズの存続が危ぶまれた第4シリーズの「イエス！プリキュア5」までを視野に入れて論じることにする。第一シリーズの「ふたりはプリキュア」の内容は以下のようになる。

スポーツ万能、勉強嫌いで無鉄砲だけど人一倍正義感が強くクラスでも人気者の美墨なぎさ、成績優秀で常にクラスのトップだが、実は天然ボケの雪城ほのか、ふたりは同じベローネ学院女子中等部の2年生。なぎさとほのかはそれぞれ不思議な生き物メップルとミップルに出会う。邪悪なドツクゾーンがメップルたちの故郷・光の園を襲撃し、地球に逃れてきたのだった。そして、メップルとミップルによってなぎさとほのかは変身する能力を与えられ、戦うことに…趣味も性格も違うふたりは力を合わせてドツクゾーンから送り込まれてくる邪悪な敵に立ち向かう！！（プリキュア15周年公式サイト　http://www.precure-anniv.com/history）

初期作品のプロデューサーであった鷲尾天は積極的にメディアに登場し、プリキュアシリーズ制作時のコンセプトについて雄弁に語っている。

女の子向けのアニメをやってくれ、と会社に言われて「無理無理。女の子の気持ちもわからないのに」って思いました。・・・企画書に書いたコンセプトは「女の子だって暴れたい！」です。[24]

プロデューサーの鷲尾や制作に関わった人物からは、「魔法」という言葉は聞こえてこない。著者自身がひじょうなプリキュアファンである加藤レイズナが、鷲尾をはじめ制作会社の全面的な協力の下に二〇〇時間を超えるインタビューで構成した『プリキュアシンドローム　〈プリキュア５〉の魂を生んだ25人』（幻冬舎、平成二四年）という著作がある。歴代のプロデューサー、シリーズディレクター、キャラクターデザイナー、美術、声優、作曲家、プリキュアの玩具を担当したバンダイ製作者など、制作に関わった主要な25人にとにかくインタビューを行い六〇〇頁近くにまとめた著作である。

アニメやマンガを考察する際に、ぜひとも試みたいのが、たんなる作品の分析だけでなく、製作者を始めとした制作サイドへのインタビューである。なぜ「魔法少女」をテーマにした作品を制作するのか、制作者にとって「魔法」や「変身」はどのような意味を持っているのか、作品の意図は何か・・・しかしながら実際には、これらの人物に会うことは困難である。『プリキュアシンドローム〈プリキュア５〉の魂を生んだ25人』は、たとえ加藤というフィルターを通したとしても、こうした考察にかなりの程度応えるものであると考える。以下、「魔法」を念頭に置きながら、制作に関わった人々の対応を考察することにする。

魔法少女シリーズとしての「プリキュア」のコンセプト

プロデューサーの鷲尾が会社から制作依頼受けたのは日曜朝８時半に放送する女の子向けアニメである。[25] プリキュアの制作に関しては、放送枠のＡＢＣ朝日放送が内容について提案をし、広告代理店のＡＤＫがスポンサーと制作会社を探す。その後、各社のプロデューサーが集まって番組の方向を打ち合わせる。[26] 会社からの提案はあくまで「日曜朝８時半に放送する女の子向けアニメ」であり、この時間枠は東映アニメーションによる「魔女っ子シリーズ」であった。鷲尾は、ほかの少女向け作品をどのくらい観ているのかという質問

に、「それが全然観ていないんですよ」[27]と答えている。「基本は学園ラブコメディだと思います」[28]とも述べている。第三シリーズの視聴率が伸び悩み、上司からは担当プロデューサーを離れる可能性を指摘され、背水の陣で制作された[29]「Yes!プリキュア5」の場合、その発想は『湘南暴走族』という暴走族マンガであったという[30]。

鷲尾は、世界観は西洋ファンタジー的[31]と述べていて、魔法は排除したと指摘している[32]。この点は、後ほど問題にしたい。

プリキュアシリーズでの配慮

以下に観るように、鷲尾は制作に関して一貫したポリシーを持っており、言葉や表現、衣装にもきわめて細かい配慮を行っている。例えば、「悪者」「敵」という単語は外した[33]、「戦う」という言葉は使わない[34]といった具体である。なぜならば「差別的なニュアンスがいやだったんですよ。「勝つ」という単語は「負け」をさげすむ気持ちがにじみ出てしまうし、「敵」は自分が「正義」であることを正当化して主張する意味合いが出てしまう。プリキュアは自分たちの日常を阻害する者たちに立ち向かっているだけで、勝ち負けでやっていることではない[35]。」その他にも、父親とゴッコ遊びをしたときに、父親を「悪者」「敵」にするのはよくないといった発言もある。

お腹にはパンチをあてないようにしている[36]、海水浴のシーンでは胸の谷間を描かない、外見に関する美醜の表現、食べ物を粗末に扱っているように見える表現は避ける[37]、子どもが健康でたくさん食べるのはすべての親御さんの願いだからプリキュアではダイエットはしない[38]、といった具合で、子どもとともに親への細やかな配慮が随所に見られる。「子どもが大人にしゃべるときも、絶対に敬語[39]」といった決まりすらあるのである。しかし、それにも関わらず魔法に関しては言及がないのである。

プリキュアの「変身」

シリーズディレクターの小村敏明は、一番気を付けていたことは何かと尋ねられて、「変身バンクかな[40]」と答えている。変身バンク

とは、毎回繰り返し放送される変身部分のことである。玩具に関しても一番売れるのは変身アイテムで、春休み、ゴールデンウィーク、夏休みと山があって、大きいのがクリスマス[41]であるという。

プリキュアの変身シーンは従来の魔法少女ものとは異なっている。一人で変身することができず、手をつないで初めて変身するのである。見方を変えれば、「ふたりいないと変身できない、という枷[42]」ともなる[43]。鷲尾が「友情ということばは大きかった。・・ふたりの友情の物語からはじまり、人気になった[44]」と述懐しているように、性格も関心もまったく異なる二人の友情、絆を表現するために取られた方式である。

『Yes!プリキュア5』ではプリキュアの人数が一気に5人になる。変身も一人に一話を使い、さらに五人目の水無月かれんは変身に失敗する。最終的に6話目で変身が可能になるように、「変身」に力点が置かれていることはよく理解できる。

変身について鷲尾が興味深いことを述べている。

テレビシリーズを長くやっていると、変身しないお話しが合ってもいいんじゃないかとも言われますけど、それは子どもにとって意味がないんです。時代劇と同じなのかもしれないですね。理不尽な権力者がいて、虐げられている庶民たちがいる。それを庶民の代わりに成敗してみんな胸がすく思いをする。それは「水戸黄門」や「銭形平次」「遠山の金さん」でもあるんです[45]。

ようするに「変身」は放送内容としては不可欠だが、場面転換の役割を果たしているだけでとくに意味がない、といっているように思える。先に「セーラームーン」の変身についても分析者の複数の解釈をみたが、制作者側はその意味づけについてはほとんど考えていないように思える。変身は非日常を生み出し、非日常的な世界で戦いが行われるといってみても、場面転換とどれだけの相違があるだろうか。

制作者にとっての「魔法」

これまで観てきたように、シリーズをリードしたプロデューサーの鷲尾天が子ども向けの番組であることに十分に留意して制作していることは理解できる。しかし「魔法」についてはほとんど語らない。鷲尾は『プリキュアシンドローム　＜プリキュア5＞の魂を生んだ25人』の中に頻繁に登場する。単独インタビューでない場合でも、声優さんや美術さんへのインタビューにも同席し、会話に加わっている。「プリキュアシリーズ」だけの600頁近い著作の中で、鷲尾が「魔法」に言及しているのはきわめてわずかである。その際の鷲尾は「魔法」を忌避するような発言を繰り返す。「「プリキュアは魔法じゃありません！」って。変身すること自体がファンタジーなので、魔法は組み込みたくなかったんです」[46]と述べるのである。

魔法ものでいうと「ロード・オブ・ザ・リング」も「ハリーポッター」もファンタジーの世界観の中でリアリティをちゃんと描いている。構築するまでに大変緻密な作業があったと思います。私がテレビシリーズをやるときに、そこまで構築することは難しいだろうと思ったんです。だったら自分の中にあるリアリティ、すぐ身近にあるちょっとした不思議な世界を描いてみようと。[47]

鷲尾の表現自体が微妙であるが、「ロード・オブ・ザ・リング」や「ハリーポッター」は「魔法もの」で、ちょっとした不思議な世界はファンタジーということだろうか。それとも同じなのか。前二作品のようなリアリティを持ったファンタジーとまでは無理なので、「身近な不思議」を扱うという意味だろうか。

しかしながら、悪の勢力・ドツクゾーン、ジャアクキング、滅びの力で世界を支配しようとするアクダイカーン、悪の集団ナイトメアなど、シリーズ毎に敵キャラが設定され、街や人が巻き込まれ世界が危機に瀕するのは「身近にあるちょっとした不思議」なのだろうか。

おわりに：魔法は解けるのか

セーラームーンに関する考察で、日常性の回復こそが重要なのではないかと指摘した。プリキュアシリーズでも同様のことが指摘できる。たとえば、鷲尾は「敵」や「戦い」という言葉を使わないと述べているが、次のようにも語っている。「プリキュアは自分たちの日常を阻害する者たちに立ち向かっているだけで、勝ち負けでやっていることではない。[48]」

日常の回復は必ず行われる。つまり、「のりうつられた者もちゃんと戻っている。ビルとかが壊れていても、戦いが終われば必ずもとに戻します。「悪い要素が取り払われればもとのものだよ」ということですね。[49]」

セーラームーンでは、再生したということでもとの中学生に戻っているが、16シリーズに及ぶプリキュアシリーズでは「キャラクターが歳をとらない方式にした。[50]」という。脚本を担当した村山功がインタビューの中で次のように述べている。

夢に向かって進もうとしている彼女たちが歳を取らない。とんでもない矛盾ですよね。永遠を否定し続けていた彼女たちが永遠の若さを手に入れている[51]

魔法少女も含めて、低年齢に向けて制作された魔法少女は、仲間の重要性と日常性の回復、そして日常世界の肯定こそが問題であって、魔法という力が生じる源泉やその世界観を描くことにはきわめて無頓着である。制作者が「魔法」に無関心であるのは、なにもプリキュアに限らないのではないか。

ところで、制作者が「魔法」や「変身」に通り一遍の解釈しか与えないとしても、これらのアニメが複数、長期間にわたって継続的に放送されたきたことを考えると、アニメで表象されてきた「魔法」の影響は小さくないと思われるのである。子どもの親は、こうした番組を子どもに有害なものとは考えない。すでに述べたように、クリスマスに子どもへのプレゼントとして変身グッズを渡すことに躊躇はないだろう。

そして筆者が冒頭で指摘したように、神社や寺と関わって行われてきた様々な行事が縮小し、家庭の宗教性が希薄化している現代社会において、メディアが「身近な不思議」や「魔法」を継続的に表象する媒体となっていることは十分に意識すべきと考える。これらの媒体は本来宗教的情操の涵養や、正確な宗教知識を伝えることを目的にしているわけではない。我々を取り巻く情報環境は増大しメディアミックされている。冒頭で一九九〇年代以降、数多くの「魔法少女」アニメが現れたと指摘したが、これらの想定する視聴者は「女児」を中心とした年代層ではない。「魔法使いサリー」や「ひみつのアッコちゃん」を同年齢層の男児がみていたことがわかっているが、深夜アニメ枠で放送される「魔法少女」のアニメは十二分に成熟した大人をも取り込んでいる。さらにいえば、今回取り上げた「魔法少女」だけでなく、世界の神話に登場する多様な神々がキャラクターとして登場するアニメ、断片的ではあってもモチーフ自体に神話的なものが見られるアニメ、天国や地獄を舞台としたアニメ、一般人の持ち得ない超常的な能力の持ち主が現れるアニメを列挙していけばきりがないほどである。私たちはメディアで自生する宗教の中にどっぷりと使って日常生活を送っているのである。

注

1. 石井研士「魔法と変身－「魔法少女」形成期における「魔法」」（『國學院大學紀要』第五六巻、平成三〇年）、石井研士「「魔法」という矛盾－「魔法少女」形成期における「魔法」の位置付けについて」（『國學院雑誌』第一一九号、平成三〇年）。アニメ・マンガを中心としたポップカルチャーと宗教に関しては、「ポップカルチャーと宗教序論」（『國學院雑誌』第一一六号、平成二七年）参照。
2. 「大ヒット」や「社会現象」の明確な基準はない。過去に放送されたアニメの視聴率を確認するのも容易ではない。マンガに関しても総販売部数を知ることも困難である。「まどか☆マギカ」については「爆発的なヒット」（『TV日本アニメーション大全』世界文化社、平成二六年、四五二頁）、「ダークな中に希望を見いだすストーリー、アート的な表現などで大人気」（氷川竜介『アニメ一〇〇年ハンドブック』IRD工房、平成二九年、八〇頁）といった評価がある。
3. 放送は平成二三年一月から四月にかけて系列三局で行われた。たとえばTBSテレビでは金曜日の深夜一時五五分から二時二五分まで放送された。二三

時から二八時の間に放送されたアニメを深夜アニメという。

4. 石井研士『テレビと宗教』（中央口論社、平成二〇年）参照。

5. 「アニメと宗教」井上順孝編『現代宗教事典』弘文堂、平成一七年。

6. たとえば、正木晃『はじめての宗教学『風の谷のナウシカを読み解く』』（春秋社、平成一三年）をはじめとする正木の一連の著作、山田利博『アニメに息づく日本古典』も丹念に多様な宗教伝統を拾い上げている。

7. 詳しくは石井研士「魔法と変身ー「魔法少女」形成期における「魔法」」『國學院大學紀要』（第56巻、三〇年）参照。

8. 『日本アニメーション大全』世界文化社、平成二六年、一五九頁。

9. 『魔女っ子大全集　東映動画篇』BANDAI、平成五年、一三二頁。

10. 同。

11. 『アニメ作品事典ー解説・原作データ付きー』日外アソシエーツ、平成二二年、六四二頁。

12. 石井研士「ポップカルチャーと宗教ーマンガ・アニメにおける「生まれ変わり」ー」『國學院大學大学院紀要』（第四八輯、平成二九年）参照。

13. イラストなど、場合によっては多少大人びた姿で描かれることもある。

14. 斎藤美奈子『紅一点論』ビレッジセンター出版局、平成一〇年、三一頁。

15. 「不思議のアッコちゃん」のように、完全に別人になるわけではないが、それでも同型ではない。

16. セーラー戦士は、セーラームーンを初め、セーラーマーキュリー（水星）、セーラーマーズ（火星）、セーラージュピター（土星）、セーラーヴィーナス（金星）の五人である。変身のための呪文であるが、たとえばセーラマーキュリーであれば、「マーキュリーパワーメイクアップ」となる。

17. 高田明典『アニメの醒めない魔法』ＰＨＰ研究書、平成七年、一一一頁。

18. 四方田犬彦『「かわいい」論』筑摩書房、平成一八年一二六～一二七頁。

19. 先にセーラー戦士は変身シーンはあるが解除シーンはないと記したが、戦いに負けた際に何度か変身が解かれている。その様子は裸体に赤いリボンが巻かれて横たわった姿や、体を巻くリボンが透けて裸体が見えるようになっている。また、美少女戦士セーラームーンのキャラクターを使用したポルノチッ

クな同人誌は数多く存在する。

20. 四方田犬彦「アニメの越境と『セーラームーン』」『ユリイカ』二八（九）、八七頁。

21. 読売新聞平成五年三月三日号の「放送塔」に「子供の食事がノドを通らなくなった」と投書があったとされるが（青柳美帆子「全ては『劇場版美少女セーラームーンR』から始まった」（『ユリイカ』No.708,Vol.49-15、平成二九年、一四七頁）、実際には確認できなかった。

22. 斎藤美奈子『紅一点論』ビレッジセンター出版局、平成一〇年、一五頁。

23. 論文としては次の二点を挙げることができる。増田のぞみ「女の子向けテレビアニメ」を問う―『プリキュア』シリーズの挑戦」（『年報『少女』文化研究（3）』平成二一年）、木村至聖「女児向けアニメにみる新自由主義時代の社会的規範：『プリキュア』シリーズを手がかりに」（甲南女子大学研究紀要・人間科学編（54）、平成二九年）。増田は二シリーズを取り上げて、プリキュアが女の子向けテレビアニメに何を投げかけたかを考察している。木村の論文は、プリキュアが新自由主義社会に適合的な社会規範を内面化させ「社会化」する装置としての役割を果たしているとして、「プリキュア」というアニメの時代的な社会的機能を読み取ろうとする論考である。他にも『アニバタ　特集プリキュア』（Vol.12、平成二七年）にはプリキュアのファンによる数多くの論評が掲載されているが、研究とは一線を画すものである。

24. 「男女の差なんて、ない　プリキュア生みの親、秘めた信念」（朝日新聞、平成三〇年二月二八日。

25. 『プリキュアシンドローム　＜プリキュア5＞の魂を生んだ25人』幻冬舎、平成二四年、五八三頁。

26. 同、六六頁。

27. 同、一〇六頁。

28. 同、七二頁。

29. 同、七六頁。

30. 同、四〇頁。

31. 同、二四三頁。

32. 同、一〇六頁。

33. 同、三三四頁。
34. 同、二七〇頁。
35. 同、三八二頁。
36. 同、三三四頁。
37. 同、五三二頁。
38. 同、九七頁。
39. 同、九六頁。
40. 同、二二六頁。
41. 同、一六一頁。
42. 同、一九一頁。
43. 第二四話「新たなる五人の力！」では、敵の策略で仲間たちが絶望の仮面をつけられて窮地に陥る。そのときにはじめて五人がてをつなぐ（七一頁）。
44. 同、七〇頁。
45. 同、一一七頁。
46. 同、一六五頁。
47. 同、一〇六頁。
48. 同、三八二頁。
49. 同、一二九頁。
50. 同、一四六頁。
51. 同、五〇三頁。